

令和元年6月8日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03260

研究課題名(和文)近代ヨーロッパを中心とする女性の空間的移動とジェンダーの変容に関する比較史研究

研究課題名(英文) A comparative study on the female migrants and the impact of migration on gender in modern European history

研究代表者

北村 暁夫 (KITAMURA, Akeo)

日本女子大学・文学部・教授

研究者番号：00186264

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：17世紀から20世紀前半までの近代ヨーロッパを対象としたさまざまな形態の空間的移動(移民)を実践した女性を対象として、移民とジェンダーとの相互的な関係を明らかにすることを目的とした研究である。公共圏における女性の政治・社会運動への参加、賃金労働の市場への参入、親密圏における家父長的支配や母親の家族に対する影響力といった諸点をめぐる事例研究を行った結果、女性における移民実践において婚姻と婚姻戦略が重要な意味を持つこと、女性による資産保持(資産形成)が移民実践を促進すること、移民実践後に女性の家庭外就労の機会が増大することで家父長的支配の弱体化がみられることが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年のヨーロッパ諸国で介護労働に従事する外国人が急増し、「移民の女性化」が叫ばれる状況に対して、17世紀から20世紀前半のヨーロッパにおいても女性による移民実践が多数存在したことを指摘し、その具体的な事例を共同研究の形で蓄積したことは、長い歴史のスパンの中で今日の状況を理解する上で、大きな学術的・社会的意義を持っている。また、政治・社会運動への参加、市場経済への参入、親密圏における変容の三つに分節化したうえで、移民実践の前後において女性の社会的・経済的地位の上昇や家父長的支配の相対的弱体化を指摘したことは、大きな学術的意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on the European female migrations between 17th century and the first half of 20th century and seeks to analyse reciprocal relations between migrations and the gender. By making the case studies of female migrations from the point of view of the women's participation to political and social movements, their entry into the labor market, and the influence of their migration on the patriarchy in the private sphere, it concluded that the marriage and matrimonial strategy were important factors for the migration practice, that the preservation (or formation) of personal asset provoked it, and that after the migration, the augmentation of occasions of female work outside the family weakened the patriarchal control on family members.

研究分野：西洋史 移民研究

キーワード：移民 ヨーロッパ史 女性 ジェンダー 公共圏 親密圏 家父長的支配 比較史

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年のヨーロッパ諸国では、介護労働に従事する外国人女性の急増を主たる要因として、「移民の女性化」と呼ばれる事態が進行している。近年の現象が「女性化」と呼ばれるのは、歴史的に空間的移動を実践する人々の多数が男性によって占められていたという認識に基づいている。実際に、19世紀後半から20世紀半ばまでの時期のヨーロッパ人の空間的移動に関する統計資料を見ると、「移民」における男性の数的優位は明らかである。しかしながら、この認識には一定の留保が必要である。(なお、人間の空間的移動を表す日本語の用語は複数存在し、本来コンテキストに応じて使い分けるべきであるが、以下では暫定的に「移民」という用語で統一する。)

第一に、女性の移民が男性に比べて相対的に少ないとしても、女性移民の絶対数は膨大なレベルに達していることを忘れてはならない。第二に、アメリカ合衆国の移民史家ガバッチャが指摘するように、呼び寄せの形で移民に占める女性の比率が急増し、過半数を超えることもしばしばあった戦間期のアメリカの事例など、限定的な局面ながら女性が多数を占めるという事例も存在していた。(Donna R. Gabaccia, *Spatializing gender and migration: The periodization of Atlantic Studies, 1500-present*, カンフェレンスペーパー (2014年1月25日、日本女子大学))。第三に、アメリカの移民史家ブレットによる著書のタイトル『移民する男、待つ女』が示すように、男性が不在となる中で、郷里にとどまる女性たちが郷里での経済活動(農作業や家内工業)や高齢者介護、育児といった役割を担い、移民を実践する家族の戦略において重要な位置を占めている(Caroline Brettell, *Men who migrate, Women who wait*, Princeton U.P., 1986)。このように、移民実践に占める女性の重要性はきわめて大きいにもかかわらず、男性が数的に優位を占めるという認識は、女性移民の存在をきわめて見えにくいものにしてきたのである。

(2) 本研究グループのメンバーの大半は、2011年度～2014年度科研費基盤研究(B)「近代ヨーロッパを中心とする空間的移動の実態と移動の論理に関する比較史研究」(研究代表者:北村暁夫、課題番号:23320164)による共同研究を遂行してきた。この成果を踏まえ、移民を移動実践の主体として捉えるという視点を堅持したうえで、移民とジェンダーとの相互的な関係を中心的な課題に据える新たな共同研究を遂行する必要があるという認識に達した。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究は17世紀から20世紀前半までの近代ヨーロッパを対象として、さまざまな形態の空間的移動(国内移動/ヨーロッパ諸国間の移動/大陸間移動/移動後の第二次移動、経済的な移民/政治亡命/難民)を経験した女性を対象として、空間的移動とジェンダーの相互的な関係を明らかにすることを目的とする。具体的には、公共圏における女性の政治・社会運動への参加、賃金労働の市場への参入、親密圏における家父長的支配や母親の家族に対する影響力といった諸点をめぐる事例研究を行い、出身地域・国のジェンダー関係が移動実践に与える影響と、移動実践が出身地域・国との移動先の国・地域におけるジェンダー関係に与える影響のそれぞれについて考察することを目的としている。

(2) 上記の作業を通じて、参加者が研究対象とする個別の諸事例が近代ヨーロッパにおける女性の移動の全体的なコンテキストの中でどのような位置にあるかを明らかにするとともに、移動とジェンダーの相互的な関係を世界史的な枠組みのなかで理論化していくことも、本研究の重要な目的である。

### 3. 研究の方法

(1) 研究の出発点は、参加者各人が自らの専門とする時代と地域における女性の移民に関する事例を提示することにある。国内移動/ヨーロッパ諸国間の移動/大陸間の移動、経済的な理由による移動/政治・社会的な理由による移動など、さまざまな種類の移動の中から参加者が事例を選択する。個々の事例研究では、移動する前における家父長的支配の実態と女性の家族内の地位、女性の政治・社会運動への参加の程度、賃金労働への女性の参入の度合いといった点に着目し、こうした家族・国家・市場におけるジェンダー関係が女性による移動実践にどのような影響を与えたのかを分析する。ついで、移動したのちにおける家父長的支配の実態や政治・社会運動への女性の参加、賃金労働への女性の参加といった点に着目することで、女性による移動実践を通じて、家族・国家・市場におけるジェンダー関係がどのように変容したかを分析する。

(2) 次に、参加者各人が事例研究で得られた知見を持ち寄り、17世紀から20世紀前半におけるヨーロッパを中心とした女性移民に関する比較史研究を行う。国内移動/国外移動、家族による移動/単身による移動、合法的な移動/非合法的な移動、市場参入型の移動/家族経済維持の移動といった諸種類のマトリクスのなかに関個々の事例を位置づけながら比較検討することにより、女性の移民とジェンダーとの相互性に関する理論化を図るものである。

### 4. 研究成果

(1) 参加者が各人の対象とする個別事例を提示し、それらを類型化する作業を行った。参加者の個別テーマは以下の通りである。

・親密圏(家族)をめぐる事例 北村暁夫：19世紀末から20世紀初頭に南イタリアからアメリカ合衆国に移住した農民出身男性とその後の呼び寄せによって再統合された家族を対象として、移民によるジェンダー関係の変容について考察した。呼び寄せによって女性がアメリカに移住したのち、女性の家庭外での労働が認められないなど、しばらくの間は家父長的な支配が継続される傾向にあるが、都市的空間での生活が続くことによってそれが次第に弛緩していくことを明らかにした。

青木恭子：19世紀後半から20世紀初頭にヨーロッパロシアからアジアロシアの農業フロンティア地帯へ国内移民した農民家族を対象として、移民前後のジェンダー関係の変容について考察した。家父長支配の強固な農民家族は国内移民ののちも家父長的な支配をしばらく維持したことが明らかになるとともに、フロンティアへの移動には家族の再生産のために女性の移動が不可欠であるとみなされていたことが明らかになった。

山手昌樹：ファシズム政権下で行われた総合開墾事業によって北イタリアから国内移民した農業労働者の家族を対象として、移民による地域社会のジェンダー変容について考察した。ここでは、移民家族のジェンダー関係の変容よりも、むしろ、女性の家庭外での行動が比較的自由に認められていた移民家族の流入により、国内移民を受け入れた地域社会の伝統的なジェンダー関係が変容していったことが明らかにされた。

・政治・社会運動への参加をめぐる事例 一政(野村)史織：アメリカ合衆国の社会活動家エミリー・グリーン・ボルチの思想と行動を中心に分析することで、彼女が社会改良の対象とみなしていたスラヴ系移民のジェンダー観を考察した。ボルチはオーストリア・ハンガリーに留学して社会調査を行った経験を持つため、スラヴ系の人々の移民の前と後のいずれの状況についても知悉していた。彼女の社会調査・社会改良活動というフィルターを通して、スラヴ系女性たちが移民先で家庭外の労働に次第に従事していく過程を明らかにした。

山本明代：ハンガリー王国出身の移民女性たちがアメリカ合衆国で発行されたハンガリー語新聞『自由』が主催した作文コンクールに投稿した文章を史料として、移民の前と後でのジェンダー関係の変容について考察した。女性が移民する目的の一つが婚資を得ることであったことが明らかにされるとともに、移民を通じて女性たちが家父長支配やハンガリー王国時代の政治的な抑圧から解放されたという意識を持っていたことが明らかにされた。

田中ひかる：ロシア出身のユダヤ系女性でアメリカ合衆国に移住したのちにアナキストとなった人々を対象として、移民によるジェンダー関係と政治意識の変容について考察した。ユダヤ人集住地域で生活していた女性たちはユダヤ教に基づく倫理を内面化し、日常的には家事労働に従事することが一般的であったが、移民により工場労働者となり賃金を獲得することで、男性と女性が台頭であるという意識を持つようになり、そのことがアナキストとして活動するうえでの大きな契機となったことが明らかにされた。

・市場への参入をめぐる事例 平野奈津恵：ベルギー出身でパリに移住し、家事労働者となった女性を対象として、彼女たちがパリを移民先として選択した理由やパリにおける労働の実態について考察した。ベルギー人の多くが北フランスを主たる移民先としたのに対して、国内のブリュッセルや北フランスではなくパリに移住して家事労働に従事することを選択した女性たちは高賃金と自由を求めていたことや、年代が下るにつれて労働内容が多様化していったことを明らかにした。

木村真：19世紀から20世紀初頭にかけてバルカン山脈の中部・東部地域から南部・北部の平野や丘陵地帯、都市部へ出稼ぎ的な移民を行った女性たちを対象として、彼女たちの労働の実態と経済構造の変動との関係について考察した。当初は短期間の収穫を中心とした農業労働に従事していた女性たちが、戦間期に都市部で富裕層が増大すると次第に家事労働に転じていったことや、若年の未婚女性の移民が増大していったことを明らかにした。

杉浦未樹：18世紀のオランダ領ケープ植民地を対象として、世界有数の富裕地域へと成長したケープ都市部と拡大するフロンティア地域との比較を通して、移動に伴う女性の財産形成の実態を考察した。オランダ本国とは異なり夫婦間相続が認められていた植民地社会では、女性の就労機会が限定されていたにもかかわらず、相続を通じて女性が割り当て地を獲得し、そのことが都市人口の拡大とあいまって、フロンティアの拡大をもたらしたことを明らかにした。

(2) 以上の個別事例の提示とともに、研究会活動を積み重ねるなかで、女性移民の移動前後におけるジェンダー関係の変容に関する総合化、理論化を図った。指摘すべき第一点は、女性による移民実践における婚姻の重要性である。未婚の女性の単身による移民という事例は少なからず存在するものの、規範的には忌避される傾向が強く、本研究が対象とする時期において数量的に少数であることは明らかである。これに対し、たとえばロシアの国内移民の事例では、結婚により核家族が成立していることが移民を可能にしており、また、イタリアやハンガリー王国などからアメリカ合衆国へ移民した女性の多くが、婚姻後の呼び寄せを移民の直接的理由としているのである。第二点は、女性による資産保持(資産形成)が移民実践を促進するという点である。たとえば、ケープ植民地では夫婦間相続の慣行により女性が資産形成を行うことが容易となり、このことが第二次移動、第三次移動を引き起こしているし、イタリアやハンガリー王国などからアメリカ合衆国への呼び寄せにおいては、女性が法的には財産保有権を認め

られていないにもかかわらず、男性の不在により女性が実質的な財産保有者として機能し、そのことが移民実践を容易にしているのである。第三点は、移民実践後に女性の家庭外就労の機会が増大し、そのことが家父長的支配の弱体化をもたらすという点である。たとえば、ロシア帝国領内からアメリカ合衆国へ移民したユダヤ系女性たちは、アメリカで家庭外の労働に従事したことを契機として政治・社会的活動に目覚めていったのである。

(3) 研究成果を広く発信することを目的として、2019年5月の第69回日本西洋史学会において小シンポジウム「近代ヨーロッパの女性移民とジェンダー規範」を行った。報告者は杉浦未樹、一政(野村)史織、山本明代、山手昌樹の4名(報告順)であり、これらの報告に対して藤川隆男氏(大阪大学大学院文学研究科)がコメントを行った。討論では、ジェンダー規範という用語をどのように定義するのか、ジェンダー規範とナショナル・アイデンティティとの関係をどのように考えるのか、移民実践によって家父長的支配がむしろ強化するということは考えられないのか、といった疑問点・論点が提示された。

(4) シンポジウムで出された疑問点・論点は、本研究が今後も引き続き検討すべき課題である。とりわけ、移民実践の前後において家父長的支配が弛緩するのか、それとも強化されるのかという論点はきわめて重要である。政治・社会運動への参画や市場経済への参入といったテーマに比べ、家父長的支配を含む親密圏に関する事象については、研究の基盤となる史料の発掘・収集がより困難であるため、事例を積み重ねていくことが容易ではない。また、「家父長的支配」や「ジェンダー規範」といった概念も、なお一層精緻化されることが求められている。性急な一般化は避けつつも、この論点に関する理論化を図ることが当面の大きな課題として残されている。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計18件)

一政(野村)史織、セツルメント運動の活動家エミリー・グリーン・ボルチと社会学 スラヴ移民像と同化における性役割分業、英語英米文学(中央大学)、査読無、58、2018、67-90

一政(野村)史織、子どもたちの組織化と越境的なネットワーク 第一次世界大戦中の米国クロアチア民族協会青少年部、アメリカ太平洋研究、査読有、18、2018、81-97

田中ひかる、ロシア出身のユダヤ系移民女性がアナキストになった要因に関する考察 移民前のロシアでの経験に焦点を当てて、歴史研究、査読無、55、2018、51-79

山本明代、第二次世界大戦期ハンガリーにおけるドイツ系住民の強制移住と地域社会、歴史の理論と教育、査読有、148・149、2018、27-40

北村暁夫、南米のイタリア移民 ブラジルとアルゼンチンを中心に、立教大学ラテンアメリカ研究所報、査読無、46、2017、1-13

一政(野村)史織、量的内容分析の限界とクリティカル・ディスコース・アナリシスの可能性 言説とヘゲモニーをめぐる議論から、白門、査読無、69-3、2017、36-44

杉浦未樹、近世商都アムステルダムと商人邸宅街：都市拡大と商人集団の集住をめぐって、都市史研究、査読有、4、2017、115-122

田中ひかる、現代アナキズムから見たロシア革命、初期社会主義研究、査読有、27、2017、5-21

田中ひかる、現代のアナキズムから見たロシア革命、ピープルズ・プラン、査読有、77、2017、44-49

山手昌樹、北イタリア水田地帯の輪作体系と物質循環、農業史研究、査読有、51、2017、14-22

Yamamoto, Akiyo, US Hungarian Refugee Policy, 1956-1957, The Japanese Journal of American Studies, 査読有、28、2017、127-148

青木恭子、帝政ロシアの移住農民家族とアジアロシア植民事業、富山大学人文学部紀要、査読無、65、2016、59-82

田中ひかる、大杉栄たちの虐殺を世界に伝えたアナキスト・ネットワークについて、初期

社会主義研究、査読有、26、2016、34 - 53

田中ひかる、移民の経験から未来社会を考える、社会科教育、査読無、683、2016、36 37

山本明代、コメント：東欧史におけるネットワーク、東欧史研究、査読無、38、2016、80 - 83

北村暁夫、イタリアにおける移民の経験、アジア太平洋研究、査読無、15、2015、71 - 75

青木恭子、< >組織された先遣人派遣 - 20世紀初頭の帝政ロシアにおける移住政策の転換、富山大学人文学部紀要、査読無、62、2015、141 - 162

山手昌樹、近代イタリアにおける農業測定式の生成 ファイーナ方式とセルピエーリ係数、東海史学、査読無、49、2015、43 - 60

〔学会発表〕(計 17 件)

山本明代、1956年のハンガリー革命と難民支援の女性たち、北米エスニシティ研究会、2018

山本明代、1956年のハンガリー革命後の難民学生による社会運動、社会思想史学会大会、2018

北村暁夫、1908年シチリア・カラブリア大震災と移民行動、イタリア近現代史研究会 2016年度全国大会、2017

田中ひかる、ロシア出身のユダヤ系移民によるアナキズム運動 人の移動と思想・運動の形成、第 61 回ロシア史研究会年次大会、2017

Tanaka, Hikaru, Japanese Anarchistic Social Movements in Global and Historical Perspective. The 2017 Biennial Conference of the Japanese Studies Association of Australia, 2017

田中ひかる、現代アナキズムから見たロシア革命、シンポジウム「アナキズムから見たロシア革命」、2017

一政(野村)史織、Discourses of Women on Birth Control and Childcare: Japanese Immigrant Women and the Japanese Immigrant Media in the Early 20 Century U.S.A., アメリカ学会第 50 回年次大会、2016、

杉浦未樹、近世商都アムステルダムと商人邸宅街 都市拡大と商人集団の集住をめぐって、都市史学会、2016

杉浦未樹、Slave Cloth and Clothing in the Early Modern World, Dressing Global Bodies Conference, 2016

平野奈津恵、19世紀北フランス炭鉱都市の住民たち、帝国史研究会第 16 回例会、2016

山手昌樹、ファシスト女性の声、上智大学史学会第 66 回大会、2016

山手昌樹、北イタリア水田地帯の輪作体系、日本農業史学会 2016 年度研究報告会、2016

山本明代、第二次世界大戦期ハンガリーにおけるドイツ系住民の強制移住と地域社会、名古屋歴史科学研究会 2016 年大会、2016

木村真、バルカン地方の野菜栽培人の移動をめぐって 19 世紀後半から 20 世紀初頭を中心に、第 65 回日本西洋史学会大会、2015

平野奈津恵、フランスにおけるベルギー移民と差異の所在 19 世紀北仏炭鉱都市住民たちの帰属意識をめぐって、関西フランス史研究会第 167 回例会、2015

山本明代、The Hungarian Refugee Students in the New World after the Hungarian Revolution of 1956、ICCEES IX World Congress, 2015

山本明代、第二次世界大戦後チェコスロヴァキアとハンガリー間の住民交換の社会的影響、東欧史研究会 2015 年度 12 月例会、2015

〔図書〕(計 8 件)

北村暁夫 他、山川出版社、歴史の転換期第 9 巻 1861 年：改革と試練の時代、2018、212 - 259

田中ひかる、山本明代 他 ミネルヴァ書房、社会運動のグローバル・ヒストリー：共鳴する人と思想、2018、294

一政(野村)史織 他、日系文化を編み直す 歴史・文化・接触、ミネルヴァ書房、2017、93-105

山本明代、木村真 他、移動がつくる東中欧・バルカン史、刀水書房、2017、358

杉浦未樹 他、グローバル・ヒストリーの可能性、2017、139-160

山手昌樹 他、教養のイタリア近現代史、2017、9 - 24、41 - 55、177 - 190

杉浦未樹 他、女性から描く世界史：17～20 世紀への新しいアプローチ、勉誠出版、2016、51-74

杉浦未樹 他、世界史のなかの女性たち、勉誠出版、2015、195-204

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.euromigration.jp>（近代ヨーロッパを中心とする女性の空間的移動とジェンダーの変容に関する比較史研究）

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：青木 恭子

ローマ字氏名：(AOKI, kyoko)

所属研究機関名：富山大学

部局名：人文学部

職名：教授

研究者番号 (8桁)：10313579

研究分担者氏名一政 (野村) 史織

ローマ字氏名：(ICHIMASA-NOMURA, shiori)

所属研究機関名：中央大学

部局名：法学部

職名：准教授

研究者番号 (8桁)：20512320

研究分担者氏名：木村 真

ローマ字氏名：(KIMURA, makoto)

所属研究機関名：日本女子大学

部局名：文学部

職名：学術研究員

研究者番号 (8桁)：20302820

研究分担者氏名：杉浦 未樹

ローマ字氏名：(SUGIURA, miki)

所属研究機関名：法政大学

部局名：経済学部

職名：教授

研究者番号 (8桁)：30438783

研究分担者氏名：田中 ひかる

ローマ字氏名：(TANAKA, hikaru)

所属研究機関名：明治大学

部局名：法学部

職名：専任教授

研究者番号 (8桁)：00272774

研究分担者氏名：平野 奈津恵

ローマ字氏名：(HIRANO, natsue)

所属研究機関名：日本女子大学

部局名：文学部

職名：学術研究員

研究者番号 (8桁)：60634904

研究分担者氏名：山手 昌樹

ローマ字氏名：(YAMATE, masaki)

所属研究機関名：日本女子大学

部局名：文学部

職名：学術研究員

研究者番号 (8桁)：70634335

研究分担者氏名：山本 明代

ローマ字氏名：(YAMAMOTO, akiyo)

所属研究機関名：名古屋市立大学

部局名：大学院人文社会科学研究科

職名：教授

研究者番号 (8桁)：70363950